

# 「失す」∨「失せる」の語史

—— 中世末までの転義に至る過程を中心として ——

中山俊子

- 一 はじめに
- 二 「失す」∨「失せる」の意義と用例
- 三 「見えなくなる、消える」の時代的变化
- 三の一 主体の通時的变化と意義の変化
- 三の二 修飾句の存在と意義の変化
- 三の三 中世末までの意義の変化のまとめ
- 四 おわりに

## 要旨

中古・中世で広く流通した「失す」∨「失せる」は中世末から近世にかけて本義「なくなる、いなくなる」の衰退と共に卑罵語「行く」「来る」「居る」に転義した。本稿では本義と転義の意義的、機能的、待遇的な差の大きさに着目し、転義に到るまでの過程を意義の変化に焦点をしばり、主に主体と修飾句の面から通時的に検討した。その結果、主体の変化が述語の意義を変化させる明らかな検証が得られた。更に主体の変遷と共に述語の意味を補足しないしは際立たせるために文脈に様々な修飾語(句)が現れ、それに引きずられた述語はそれまで沈潜させていた意義機能を露わにしていく。「失す」∨「失せる」の中古中世の用例を注意深く観察することでこのような言語のダイナミズムを検証した。

## 一 はじめに

「うす√うせる」は、日本語の転換期と言われる中世から近世にかけて下一段化し、それと共に、もともとの意義「存在していたものがなくなる」から大きく転じて「行く」「来る」「居る」を卑しめ罵って言う語となった。本稿の目的は無意志性の状態動詞から意志性の移動動詞に転義するまでのその転義に至る過程を中世の用例用法を中心に検討し、通時的な意味の変遷を明らかにすることにある。

「うす√うせる」はもともとは「うしなふ」や「薄し」と同系統の語であり、「もとの形が次第に薄れてなくなる」という状態性の意味から意義が広がって行ったものである。本義「存在していたものがなくなる」は更に「死ぬ」「適当な状態でなくなる」に意義が分かれて行く。転義も「行く」「来る」「居る」の意で相手を罵って言う語に分かれて行く。**表1**は作品の中における「うす√うせる」の本義と転義計六意義の作品別、時代別の分布を示すものである。文献は一応年表に従って並べてある。『今昔物語集』はあまりに用例が多いので、巻二二（本朝）〜巻三〇（本朝付雑事）までのうち巻二七（本朝付霊鬼）を除く八巻に限定し、合計が約百になるようにした。これら八巻は怪異譚的な説話が少なく、ある程度成立年代の語彙語法を拾え

るのではないかと判断したためである。

さて、**表1**からわかることは、一に、近世「虎明本狂言」で明らかに本義から転義へと趨勢が交代していること。二に、中古中世では原義「見えなくなる、消える」より「死ぬ」のほうが多く用いられていること。三に、「適当な状態でなくなる」は中世を中心に現れていること。以上の三点である。

卑罵語に転義した時期と原因についてであるが、まず時期は中世から近世にかけてとは言えるが特定はできない。

『日葡辞書』は「なくなる、みえなくなる、逃げ去る、自国を去る、他国へ逃げる」と説明し「行く」「来る」にまで及んだ説明はない。卑罵語自体が特殊な位相語であるから大衆の中に存在していたとしても編纂者の目に止まらなかった可能性はあるが、本書は卑罵も（B・(Barro) 下品な）とその印をつけて採録していることを考えると、「うす√うせる」に卑罵の印がないことから、卑罵語「行く」「来る」になったのは近世になってからと推定される。転義の原因として「うせる」と下一段化したことが転義を促すなど何らかの関連があったのかを検討したが関連性は認められなかった。中世末に記されたただ一種類の狂言テキストとみられる『天正狂言本』<sup>(註)</sup>において下一段化した「うせる」が二例見られるが<sup>(註)</sup>いづれも意義は本義のまま

あり、近世初期の『虎明本狂言』において初めて転義した卑罵語「うす√うせる」が大量に現れる（表1 参照）。

その場合「うする」と下二段のままであっても意義は転義しており、このことから、一段化したことが転義に影響したとは考えられないわけである。従って、転義に到る過程は中世までの用例用法の中にあるとみて、本稿では中世を中心

に語の特質、主体の種類、共起する修飾句の在り方などを具体的に検討する。そこから状態性の意義であった「うす√うせる」が移動性の意義へと転義していく様を明らかにしていく。過去に「うす√うせる」に触れた論文は小久保崇明氏、山口仲美氏にあるが、いずれも「うす√うせる」の語の特性に注目し通時的な意味の変遷を追うものではない。本論に入る前に使用した文献を先に示しておく。

- ・ 日本古典文学大系・岩波書店（日本書紀・日本霊異記・竹取物語・大和物語・伊勢物語・今昔物語集・平家物語・曾我物語・御伽草子・黄表紙洒落本・五大力恋綴・浮世風呂）

・ 新日本古典文学大系・岩波書店（源氏物語別巻・源氏物語索引）

・ 日本古典文学全集・小学館（近松門左衛門集一・二）

・ 『補訂版萬葉集 本文編』佐竹昭広 木下正俊 小島

憲之共著 平成十年補訂版一刷 塙書房

・ 『万葉集漢文漢字総索引』西大寺本万葉集底本 日吉盛幸編 笠間書院

・ 『竹取物語総索引』山田忠雄編 昭和三十三年 武蔵野書院

・ 『天正狂言本 本文・総索引・研究』内山弘編著 平成十年 笠間書院

・ 『醒睡笑 静嘉堂文庫藏 本文編』岩淵匡編 昭和五十七年 笠間書院

・ 『ハビヤン抄 キリシタン版平家物語』亀井高年、坂田雪子翻字 一九六六年 吉川弘文館

・ 『徒然草』安良岡康作訳注 旺文社

・ 『大藏虎明本狂言集の研究 本文篇上』池田廣司 北原保雄 昭和四十七年 表現社

・ 『天正狂言本全釈』金井清光 平成元年 風間書房

・ 『大和物語語彙索引』塚原鉄雄 曾田文雄編 昭和四十五年 笠間書院

・ 『伊勢物語総索引』大野晋 辛島稔子編 昭和四十七年 明治書院

・ 『今昔物語集自立語索引』馬淵和夫 有賀嘉寿子編 昭和五十七年 笠間書院

・ 『曾我物語総索引』大野晋編 昭和五十四年 至文堂

## 二 「失す」失せる」の意義と用例

古代の用例を検討する前に現代の「失せる」の位置を確  
認しておく。

『分類語彙表』（国立国語研究所・昭和三十九年版）によ  
ると、2、用の類 124 抽象的関係 残存、消滅の  
項に

失セル 消え失セル 逃げ失セル

のように採録されており、一応現代語としての位置は保っ  
ている。また、『新明解国語辞典』には意義分類が次のよ  
うにある。

① 無くなる（「死ぬ」意の老人語としても用いられる）

② 「見えなくなる、の意」「行く・去る」の口頭語的

表現

用例としては「人影が失せる」（『日本語表現活用辞典』、

「やる気が——、活気が——、血の気が——」）とっとと失  
せやがれ」（『新明解国語辞典』）、「危険がこの先ないとす  
れば、さしあたり私の生甲斐は失せ、私の住んでいた世界  
は瓦解するのだった。」（三島由紀夫・金閣寺）のように、  
文の中に現れると多少古風な感じがし、主体となるものに  
は希望、意識、気力など抽象的な概念が多いようである。  
物が主体となるときは「ここに置いていた荷物がいつのま

にか消え失せた。」桜もすっかり散り失せた。」のように  
複合して用いることが多く、口頭語としてもおかしくない。

これら主体の抽象性や複合した用法は中古中世から「うす  
うせる」の持つ個性であり、中世末では本義としての  
役割は消えたかに見えた「うすうせる」であるが、現代  
でも命脈を保ち、現代語彙の一角を担っていると見える。

さて本義「存在していたものがなくなる」は上代の日本  
書紀、万葉集から用例が見られ現代でも使われている。転  
義は対者卑語という言い方もでき、近世の主に狂言、歌舞  
伎、浄瑠璃の中に現れ、現代では方言として各地方に残っ  
ている。（転義はここでは扱わない。）次に意義の説明の後  
なるべく古い用例を三例ずつ示す。その場合、アがもとも  
との意義でイ、ウはアから転じた意義と理解する。

ア、物事や人がその場から見えなくなる。ほろびる。消  
える。

① 稲むしろ川そひやなぎ水行けば靡き起きたちその  
根は宇世ず（日本書紀・顕宗即位前・歌謡・八三）

・露こそば 朝に置きて 夕には 消ゆと言へ 霧こ  
そば 夕に立ちて 明には 失すと言へ（萬葉・二・

二一七・柿本人麻呂）

・馬を移（はし）らせ疾く前（すす）めば、近づくに  
随ひ叫ぶこそ、漸くに失せて叫ば不。（日本霊異記・

## 中・第二十二)

イ、人がこの世から居なくなる。死ぬ。

②高彦根神念りて曰く 朋友喪亡(ウセ)たり 故吾即ち来弔ふ 如何ぞ死人を我に誤つや(日本書紀・神代下・水戸本訓)

・年若く失する王、最(少く)失する王(日本霊異記・

下・三八話)

・帰りくる道とをくつて、うせにし宮内卿もちよしが家の前来るに、日暮れぬ。(伊勢物語・八七段)

ウ、普通の状態がくずれて秩序や調和がなくなる。適当な状態でなくなる。

③各云合テ肝・心モ失セテ、船漕ク空モナクテナム鎮

西ニハ返リ来タリケル。(今昔物語集・卷二九・三二)

・肝心も失せて防かんとするに力もなく足も立たず、

小川へ転び入りて……(徒然草・八九段)

・かの鬼常に酒を飲む。酔いて臥したるものなれば我が身の失するも知らぬなり。(御伽草子・酒吞童子)

ア、イ、ウは以後それぞれ次のように書くことにする。

「見えなくなる、消える」、「死ぬ」、「適当な状態でなくなる」。最後の「適当な状態でなくなる」は中世から出てきて用例は多くない(表1参照)ということと、原義の

「見えなくなる、消える」とは厳密に意味を分けられない

ことも多く、文脈に左右されることから、本稿の目的である転義の過程を明らかにする方向とは異なるので考察の対象にしない。「死ぬ」は中古中世では中心的な意義であったと考えられるので、流通した時期を(見えなくなる、消える)との関連で検討していく。また転義した卑罵語は「行く」「来る」「居る」と書くことにする。

### 三 「見えなくなる、消える」の時代的变化

この章の論旨は、中古から中世末にかけての時代別用法を検討することにより、「うす√うせる」が転義に至るその過程と変化を用例用法の中に探し出し、ひいては語義の微妙な変化を浮き彫りにすることにある。語の意味は共起する他の語、時にはそれらによって生み出される文の場面・文脈によって変わってくる。中古から中世末にかけて「うす√うせる」の意義も主体の変化や文脈を左右する修飾句の存在により明らかな変化が見られる。それを検証する。手順としてはまず主体を問題にし、それに伴う意義の変化を探り、次に文脈の中の修飾語(句)の影響による意義の変化をみることになる。

さて、中古の文献として『竹取物語』『大和物語』『伊勢物語』『源氏物語』『今昔物語集』を用いた。このうち『伊勢物語』には「見えなくなる、消える」の意義用例はなかつ

た。すべて「死ぬ」の用例である。残り四文献の「見えなくなる、消える」の用例を示す。

④しら山にあへはひかりのうするかとほちをすてゝも頼まるゝかな（竹取物語・八ウ）

・さらに少将なりけりとおもひて、たゞにも語らひし中なれば、あひて物もいはんと思ひていきければ、かい消つやうにうせにけり。一寺求めさすれど、さらに逃げてうせにけり。かくてうせにける大徳なむ（大和物語・一六八）

・「かくおぞましくは（略）『行（く）先長く見えん』と思はゞ、つらき事ありとも、念じて、なのために思ひなりて、かゝる心だに失せなば、『いとあはれ』となむ思ふべき。（略）」（源氏物語・帚木）

・此ハ世ノ傳ハリ物ニテ、極キ公財ニテ有ルヲ此失ヌレバ、天皇極テ嘆カセ給テ、此ル事ナキ傳ハリ物ノ、我が代ニシテ失ヌル事」（今昔物語集・卷二四・二四）

これらの中で目立って特徴的なのは『源氏物語』であって「見えなくなる、消える」の二十一用例の主体が四例を除いてすべて「かゝる心」「うつし心」「光」などの手に取って見ることの困難な実体のない形状を持ち、原義の「もとの形が次第に薄れてなくなる」の意味特徴を共有することである。述語の意味は主体の在り方と密接に関連し合うこ

とから、まず主体を問題にする。

### 三の一 主体の通時的変化と意義の変化

『源氏物語』の主体の在り方と奇妙に符号するのが『萬葉集』である。その特徴は語源の「元の形がだんだんなくなっていく」、あるいは「はかなくて消えやすい」といった意味特徴を有するものが大勢を占める。「消える」の意味合いが強い。傍線の語は実体を持った主体であるが当時は「女」もそのように考えられていたか、実体を持った主体はすべて「女」である。今それぞれの主体をすべてあげてみる。依拠する箇所は省略する。

『萬葉集』…………霧（一）、踏跡所、雲、妹、情、心、照月（計八）

『源氏物語』…………かゝる心、女、香、（御）心（四）、光、うつし心（五）、心たましる、明石君、外ざまに分くる心、童心、にほひ、雲居雁、御共に具して失せたる人、あやしき心（計二十一）

『萬葉集』と『源氏物語』の主体の種類から推測すると、「失す／失せる」の上代から中古の意義は「次第に無くなって最終的に消える」といったゆるやかな消え方を暗示する意味であったと思われる。

しかし一方、『日本靈異記』、『竹取物語』、『大和物語』、『今昔物語集』の主体の種類を見ると、先に書いたように

様々であって必ずしも『源氏物語』のような体系的な事実を見せていない。このことについても検証の必要があると思われる。ここにそれぞれの文献の主体をあげるが、傍線の語は単純動詞で用いられた主体であり、それ以外は複合動詞か修飾句（タチマチニ、ヤウヤクニ、ニハカニナム等）と共に用いられた主体である。単純動詞の主体に注目すること動詞の意味は複合化や文脈に修飾語（句）が存在することにより意義が変化することがあるので単純動詞で比較を試みる。

『日本靈異記』……舟、法花経、叫ぶこゑ、使の鬼、

馬牛、善悪の法、光、月の光

『竹取物語』……光、いとおしかなしとおほしつる

事、つばくらめ、かぐや姫、匠ら

『大和物語』……（近江の介がむすめ、御鷹、良少

將（3）、少將大徳（2）

『今昔物語集』はあまりに多いので一斑を示す。本稿では先に書いたように、怪異話に現れる非現実的な主体を避けなるべく中古末の「うす」の意義用法を取り上げるため常套句表現ゼロの巻を選んだ。<sup>（注1）</sup>単純動詞の肯定文の用例のみをとりあげる……玄象ト云フ琵琶、公財、長、狐、飯、

大鐘、志、此兒 等。

以上を概観して気づくのは、一に、成立年次の早い『日本靈異記』、『竹取物語』の傍線を引いた単純動詞用法の主体が『萬葉集』、『源氏物語』の主体と同じ意味特徴を有していること。これは両文献の検討の結果得られた上代、中古の「失す√失せる」のアスペクト性を内包した意義「次第に無くなって最終的に消える」の根拠を強める要素である。二に、成立年次が早い（とされている）『大和物語』の主体がすべて有生物であり、意義は「いなくなる」の方が当てはまるということ。前の二例は「女」と「鳥」であるから上代・中古の主体に当てはまるが、後ろ二例は固有名詞で男性でありこれらはすべて一六八段の「良少將」から採ったものである。この段は藤原清輔が『袋草子』で触れている原初形態の『大和物語』には入っておらず（解説二一七頁）加えて、天文七年（一五三八年）に転写された『美濃権守入道勝命本』では（一六八段の途中に殊に著しい異同がある）（解説二二三頁）等、中古初中期の資料としては問題のある段である。主体の種類からすると平安末から鎌倉時代の用法を現出している可能性が濃い。三に、『今昔物語集』では仏教説話に基づく主体や「志」のような抽象的な主体、固有名詞「玄象ト云フ琵琶」のような現実的な主体など様々あり中世へのゆるやかな流れを感じさせ

せる。これを踏まえた上で『今昔物語集』も視野に入れながら中世に移って検討する。

『平家物語』『曾我物語』になると主体の幅は有生物無生物に一層広がり、人間あり、神霊の化身あり、寺社のよ  
うな物体あり、中には上代・中古の例と同じ様な一種抽象  
的で曖昧模糊とした形状を有する非情性のものもある。そ  
れに伴って「うす√うせる」の意味も「ウセ」る時の状態  
がどうあれ、「なくなる、消える」ことだけをいうのであ  
る。「今まで存在していたものが無くなる」と言い換える  
こともできる。ただし『今昔物語集』『平家物語』『曾我物  
語』にも上代・中古の意味特徴を持った主体があるがそれ  
らは総じて否定態の用例である。それらの例を次に示す。

- ⑤ 其ノ館ノ柱ニ書付タリケル歌ハ、生ニテ不失デ有ケ  
リトナム語り傳ヘタルトヤ（今昔・巻二四・四三話）
- ・御布施には、先帝の御直衣なり。今はの時までめさ  
れたりければ、その御うつり香もいまだうせず（平家・  
灌頂）

・恥は家の病にて、未代うせせずと申ども、事にこそよ  
れ。（曾我・巻四）

右にあげた「書付タリケル歌」「御うつり香」「恥」の主体  
の形状は実体がつかみにくく、時間的な経過を経て細まり  
又薄まって消えていく特徴を有するが、主体の特徴が述語

「ウセ」の意義を支配するというより否定態であるところが  
問題であり、意味は「無くなっていない」「つまり「まだ  
存在する」のだから「ある」か「ない」かが問題なのであ  
る。原義の「次第に無くなって最終的に消える」という時  
間を内包した意味ではない。よって、主体が「次第に無く  
なる」意味特徴をもっていたとしても、この「ウセ」は単  
に「存在していたものがなくなる」という瞬間的、概念的  
な意味しか持っていない。「うす」を否定態で示すと結局  
「今猶存在する」ことを強調する効果が出て、「うす」自体  
は「なくなる」という意味しか持たなくなる。『今昔物語  
集』にはこれ以外に九例似たような主体があるが、七例が  
否定態である。

中世の意味を検証するためいくつか用例を挙げて検討す  
る。『平家物語』には（見えなくなる 消える）の用例は  
二十二例ある。『曾我物語』には八例ある（表1参照）。  
そのうち、単純動詞での用例は、『平家物語』九例、『曾我  
物語』六例である（表2参照）。その一斑を下に示す。

- ⑥ あくれば十六日、高倉の宮の御謀反おこさせ給ひて、  
うせさせ給ぬと申ほどこそありけれ（平家・巻四・競  
・「我が身の事はいかでもありなん。君の御ため御心  
ぐるし」とて、ある暮れがたに内裏を出て、行ふもし  
らざうせ給ひぬ。（平家・巻六・小督）

・灯籠の火のやうなる物の、おとゞの御身より出て、  
ば(ツ)と消るが如くして失せにけり。(平家・巻三・  
醫師問答)

・「われ、人壽六萬歳のはじめより(略)まさに見た  
りし翁なり。されば、此地結界となるならば、釣する  
ところうせぬべし。(曾我・巻八)

・今わかれたてまつりなば、さこそかなしくましまさ  
めとおもへば、涙もせきあへず。まことに、みづから  
うせなば、やがてもたえいりにたまふべき心ざしな  
れば、たつもたゝれず、ぬるもねられず、暗然として、  
なくばかりなり。(曾我・巻七)

以上の内、一、二、五番目の主体は人間であり三番目は化  
身、四番目は物である。主体が人間であれ物であれ「ウセ」  
は要するに「いなくなる、なくなる」という概念的な意味  
しか持っていない。時間を経て次第に消えて行くのではな  
い。その「ウセ」方は「行ゑもしらず」「ば(ツ)と消る  
が如くして」などの修飾句によって個別に変化している。  
このように修飾句をつけた例の代表的なものは常套句表現  
「かきつけやうにうせぬ」であり、用例④の二番目、『大和  
物語』が初出(表2参照)とされる。問題のある一六八  
段であることは一応念頭に置いておく。その後『今昔物語  
集』に突如頻出して以後は、仏教的色彩の強いものや、怪

異話を含む非現実的な説話集に特徴的に現れ、「人間なら  
ぬ神仏やその化身、あるいは妖怪が、一瞬のうちにあとか  
たもなくなる時にのみ、固定的に用いる表現」であるから、  
主体はそのようなものに限られる。

『源氏物語』にも一例ある。俗に言われる「雨夜の品定  
め」で頭中将が語る「常夏の歌の女」(後の夕顔)が主体  
である。

⑦心やすくて、又と絶えをき侍しほどに、あともなく  
こそかき消ちて失せにしか。(帚木)

セリフの場面で『今昔物語集』以前には怪異談に特徴的に  
用いられるとは限らない例と言える。ある日消えてそのま  
まになつてしまったことからこの表現を用いるにふさわし  
い場面と作者が判断したのであろう。要するに、一〇〇〇  
年頃までにこの表現はあったということになる。『源氏物  
語』の主体の調査から平安初期のころの「うすうせる」  
はじわじわと消える「時間」を内包した意味であったから  
こそ一瞬のうちに消える意味を表現するためには「かきけ  
つやうに」の修飾句が必要であったと理解する。『今昔物  
語集』と同じ時期に「死ぬ」で「うすうせる」を多用し  
た『大鏡』が成立していることも主体の変化を考える上で  
注目しなければならない。表1でもわかるとおり、中古  
から中世中頃までは「死ぬ」の方が「見えなくなる、消え

る)より多く流通している。この時期「失す」の意味は「死ぬ」の方が中心であったと思われ、「死ぬ」の主体は人間であることからやがて「見えなくなる、消える」の主体に人間が立つこともあまり不自然でなく受け入れられたことと推定される。

『御伽草子』以降の「うす√うせる」の主体に目を転じると『御伽草子』で人間が主体になる用例が更に多くなっているのが注目される。その『御伽草子』の「見えなくなる、消える」の意義二十三例中〔表1〕〔表2〕参照)、主体が限定される常套句表現八例と複合動詞(失果つ)四例をのぞいた十一例中八例が人間である。このうちの二例を示す。

⑧「さても天下の御子に二位の中將殿失せさせ給ふとて、國々を尋ね參らせ給ふとうけたまはり候。(略)」(文正草子)

・其夜ヨリ若公ノ失セ玉ヒヌル<sup>一</sup>亘只事ナラズトテ、門主ノ御嘆(キ)アツテ、到ラヌクマナク御尋(ネ)アリケレドモ、知(ル)人更ニナカリケル處ニ、(秋夜長物語)

因みに『平家物語』では単純動詞での用例が九例あるうちの四例、『曾我物語』では六例あるうちの二例の主体が人間である。このことは原義「見えなくなる、消える」の主

体が人間中心になってきたことを伺わせ、それにつれ「ウセ」の意味が「(どこかへ行って)いなくなる」に微妙に変化してきたことを意味する。本義「うす√うせる」は消滅を表す無意志性の自動詞であるから、文型としては「A(主体)ガB(動詞)スル」文となり、意志的に消えるわけではないので「ウセ」る先には関与しない。しかし、主体に人間が立つことによって「ウセ」る先が自然と意識され、文脈に意志的に「去る、行く」意味を示唆する文や語も散見されるようになる。「文正草子」の「國々を尋ね參らせ」、「秋夜長物語」の「其夜ヨリ」は「(そこを去って)いなくなる」意味に完全に転義している。この転義の早い例として用例⑥の五番目(曾我・巻七)の「みづからうせなば」は「自分から(母親の元から)ウセることになってしまったら」というのであり、「ウセ」る起点(母親の元から)は示唆されている。「ウセ」が起点から離れる行為、すなわち、「去る」へ意義的に発展した例としてこの副詞「みづから」という修飾句は注目に値する。次に挙げるのは転化途上にあると思われる用例である。少し長めに引用する。

⑨萬壽仰せけるやうは、「いかに更科承れ。鎌倉は、東の方とうけ給はる。月日は東の空より出て、夕日は西に入(り)給ふ。月日を心にあて、行け、更科」と

のたまいて、月をしるべに行く程に、すでにその夜も明けければ手塚の里にては萬壽の姫失せさせ給ふとて貴賤群集をなしければ、尼公此由きこしめし、いか様これは、鎌倉の方へ出たるらん、……(御伽草子・唐糸さうし)

この主体は「萬壽の姫」、意味は「いなくなつてしまわれた」「どこかへ行って」いないのであり、故郷を出た萬壽の姫から取り残された側の里人からの発言である。人々の意識としては単に「ここにいない」というところまでであり、行った先までは意識にないと思われる。その意味でこの「失せ」は無意志動詞の意義を保つてはいるが、主体が人間であれば必ず、「どこかへ行ってその結果」いなくなつた」はずであり、「失せ」の前後にいなくなつた事情の説明が展開する。「月をしるべに行くほどに」「鎌倉の方へ出たるらん」などである。するとこの「失せ」に読者は自然と「ここを去りどこかへ行ったであろう萬壽の姫の行動」を重ねて読むことになる。「ウセ」一語では単なる概念的な意味しか持っていないくても、文脈の中に散在する様々な修飾句(文)の影響で、「ここを去り」(起点)、「どこかへ」(去る方向や先)を包含した意味として存在しているのがこの「ウセ」であろう。反対から言えば、「ウセ」自体が「起点」や「去り行く方向や先」を意識させる要素を

持っているとも言える。故に、この段階ではまだ強い意志を包含した「去る、行く」ではないが、意識下に「意志」の芽生えを持った「ウセ」であると言うことができる。原義は「なくなる、消える」先には一切関与しない。「ただ消えに消え失せる」(平家・物怪之沙汰)のであり、常套句表現に最もその感じが強く出る。だから、「失せて」行く先が取りざたされる段階ですでに中世前期の「存在していたものがなくなる」という概念的な「ウセ」とは違ふし、もちろん上代・中古の「次第になくなっていく」という「ウセ」とも違ふ。人間が主体の中心になつた中世後期の「ウセ」は「どこかへ行って」いなくなる」といふいなくなつた先を意識した意味になっている。

### 三の二 修飾句の存在と意義の変化

中古末から中世にかけて出てくる修飾句に「行方知らず失せにけり」のように方向を意識した用例がある。用例⑥の二番目がそれである。早い例としては『今昔物語集』にも二例ある。『御伽草子』の例と合わせて検討する。

⑩院ノ下部共、後リマ立チテ追ヒケレドモ、馳散ラシテ行カムニハ、當ニ追着ナムヤハ。遂ニ行ケム方ヲ不知ズシテ失ニケリ。(今昔・卷一八・三七話)

・此長何チトモナク俄ニ失ニケリ。守、人ヲ分テ、東

西ニ尋サセケレドモ遂ニ行方ヲ不知デ止ニケリ。(今昔・卷二十六・十五話)

・鎌倉殿より、(略) けつく、散々にはたらきて、若干の人を損ざし、行方知らず失せにけり。この者、海の底、山の中にも五日十日は隠れ居候へども、さらにも人にも見えず。(御伽・あきみち)

右の三例の主体は順に「東人」「掘鐵者」「金山の八郎左衛門」でいずれも人間である。これは主体に有情物が立つことにより、「うす√うせる」に意志的な動きが含まれ、次第に方向概念にまで「うす√うせる」の意味が及ぶことを示している。意味は三例とも「逃げていなくなる」が当てはまり、強い意志を持っているのではない。しかし、「どこへ行ったのかわからないが」「どこへともなく」と不特定の方向をわざわざ述べることにより、ここを去りどこかへ移動して行った意味が明白となり、ここではない他の場所、つまり去って行った先を意識することとなる。「ウセ」た先を意識し始めた証拠であり、直接的に「ウセ」を修飾しているところが新しい。「あきみち」の例で、主体が「ウセ」た後、「海の底、山の中」と「ウセ」たであろう先を推測しているのは、「うす√うせる」が方向や場所と共起できる環境が整ったことを示すのではなからうか。先の用例⑧⑨と合わせて考えると、「時点」や「起点」や「去

る方向や先」を意識させる句や文の存在から中世後期には「失す√失せる」が移動動詞としての資格を備え始めたことが伺える。これと反比例するように本義「失す」が衰退の方向に向かっていることは、『御伽草子』では常套句「かき消すやうに失せにけり」や複合した「失せ果つ」の割合が非常に多いこと、「死ぬ」が一例しかない(この例も主語は「わが身」で意味が曖昧)〔表1〕〔表2〕参照〕ことから判断できる。従って「行方知らず」も「失す」を使うときの慣用的な修飾句となっている。

「行方知らず」と似た修飾句に次のようなものがある。

⑩せれふ ふし こひしくはたつねてもこよ伊勢の國伊勢寺本に住そ我らは、とよみてくれんにうせる。

(天正本・いもし関・六三オ)

・あくち千里をはしる こひこひと申たれともこくふにうせ申た(天正本・かう地・九二オ)

・第六 平家は主上をも法皇をもとり奉って、西国へ落ちうとせらるる時、法皇いづちともなく失せさせられたことと……おなじく平家の都落ちと、また忠度の歌の沙汰。(天草平家・卷三)

・又祇公 月にさす其指斗あらはして右三句共に聞て後三人いつちとも見へす失にけり(醒睡笑・卷八・頓作)

・語り（略）それがしを待ちかね、いづくともなく  
うせたるよし申て候が……（虎明本・はなご）

いずれも慣用句といつても良いだろう。『天正狂言本』の主体は「清水の御夢さう」と「は（ば）けもの」であり、どちらも人間ならぬ神霊の化身であり、意味的にも同じである。にもかかわらず、これまでの常套句表現と違うところは「くれんにうせる」「こくふにうせ申た」と移動する先を表す対象のニ格が現れているところである。前者の「くれん（暗）にうせる」は節をつけた歌謡の部分であり演者の自由な改変をゆるさない固定化された部分である。セリフに続くト書き部分で「ふし」と共に使われるので、

この時代においても慣用的な表現となつていたと理解できる。一方、後者の「こくふ（虚空）にうせ申た」はセリフの中で使われているので独立した用法であり、この「ニ」ははっきりと消えゆく先の対象又は方向概念を示している。いずれにしても、「失す√失せる」が方向概念を意識し出した中世前期から中世後期に至って移動する先を表すニ格が現れた事実を示すものであり、転義に格支配が関わることの例証と捉える。<sup>（注九）</sup>三番目の『天草平家』の「ウセ」は「逃げていく」のであり、仕方なくその場から去るのである。「ウセ」に意志的な意味が加わつたといつても主体の意志は消極的なものであり、人間の場合なら何かによつてその

ような状況に追い込まれるといった意味合いが強い。五番目の『虎明本狂言』の主体は「はなご」という遊女で、意味は「どこへともなく消えた・いなくなつた・去つた」のいずれでも意味は通る。自分の意志ではあるが、男を待ちきれず、多分仕方なく去つたのであろう。最初の名乗りの部分であり、固定化された表現と捉える。『虎明本狂言』では「なくなる、消える」の用例十六例は独立用法を含め一例（注三の例である）をのぞいてすべて地謡や節付け、語り、で用いられ、文章語化している。

### 三の三 中世末までの意義の変化のまとめ

さて、「見えなくなる、消える」の意義用法の変遷を転義との関わりを主として、主に「主体」と「修飾句」の面から見てきた。これを整理する。

本義「見えなくなる、消える」から転義「去る、行く」〔来る〕〔居る〕の卑罵語への転義は無意志性の状態動詞から意志性の移動動詞へ変化することである。これには主体と文脈の中に散在する修飾句が関係するとみて主体の変移と修飾句の文脈における意味機能を主に中古・中世の文献で検討した。その結果、上代・中古の「うす√うせる」は「時間と共に次第に無くなって最終的に消える」というゆるやかな消え方を示唆する意味であつたと思われ、主体も

この動詞の意味に合った意味特徴を持ったものに限られていたようだ。気体状のものや光、心、跡等である。降って中古末の『今昔物語集』あたりから中世前期『平家物語』『曾我物語』の時代になると、主体が人間を含め、具体物・抽象物等、様々な有情物非情物に広げられた。これに沿って「うす√うせる」の意味から時間性が抜け、概念的に「いなくなる、なくなる」という抽出した部分だけをさすようになつた。そのため、「どのように」(例・行ゑもしらず、かきけつやうに、ば(ッ)と消ゆるがごとくして、等)を示す修飾句と共に起すようになる。更に降って中世後期『御伽草子』には意志動詞「去る・行く」の意義が反映された用例が見られるようになる。この変化の萌芽は用例⑥の五番目『曾我物語』まで遡ることができる。『御伽草子』の「うす√うせる」の主体は人間が七十二%を占め、従って「うす√うせる」に意志的に「どこかへ行っていないなくなる」意味が加わり、方向や「ウセ」た先を表す語句、時点や起点を表す語句が文脈に散在して(用例⑧⑩)「どこへ」と消える方向や場所を意識させる語となっていた。十六世紀末の『天正狂言本』には「対象のニ格」と思われる「こくふに」「くれんに」が出現。この時点で「うす√うせる」の意味は転義(去る・行く)にごく近づいていたものと思われる。更に降って十七世紀中頃の『虎明本狂言』になる

と本義(なくなる、消える)はすでに文語と認識されていたことはそれらの例がごとく謡や節付けやト書き部分のみで用いられていることから判断できる。

#### 四 おわりに

本義と転義の意味的、待遇的な落差があまりにもはなはだしいことへの興味から「失す√失せる」の上代から中世末までの意義の変化を通時的に検討してきた。その結果、転義に至るその道筋が、主体や修飾句の在り方や共起する助詞などに起因することの例証を得た。殊に主体の変化は述語の意味を変化させる主導的な役割を持ち、次には主体により変化した述語の意味を補足しないしは際立たせるために文脈に修飾語(句)が必要となり、それに引きずられた述語は更なる発展変化へと向かう、このような言葉のダイナミズムを「失す√失せる」の意義を通時的に検討することによって理解し得た。

本義と転義のもう一方の側面である待遇性の問題について「語源」と「複合することで生まれる派生義」が関係しているのではないかと予測して卒業研究で検討したが、確実な証拠を見付けるまでには至らなかった。語義を変化させる要因は言語自体にあるというだけでなく、歴史や社会に起因するもの、人間の心理に起因するものなど単純では

なく、次の課題としたい。

卑罵語に転義してからの意義の変化や機能の多彩さをここにはとりあげていないが、全体としてみた「失す√失せる」は意味的にも機能的にも幅の広い語であると言えるだろう。語構成的には複合動詞の上接語にも下接語にもなり、補助動詞的に共起する語に付属的な意味を付加することもあり、接頭辞的振る舞いも果たす。意義を時代や共起する他の語に合わせて自由に変えて行くと言う意味で変幻自在の内包の大きい語であると言える。

この論文を書くに当たっては山口堯二先生に多大なご指導を賜りました。改めて感謝申し上げます。

表1 「失す>失せる」の作品別意義別延べ用例数

	見えなくなる 消える	死ぬ	適当な 状態で ない	去る 行く	来る	居る	計
萬葉集	8						8
日本霊異記	8	3					11
竹取物語	5						5
大和物語	8	11					19
伊勢物語		4					4
源氏物語	21	85					106
今昔物語集	45	59	3				107
平家物語	22	32	1				55
曾我物語	8	16	1				25
御伽草子	23	2	1				26
天正狂言本	5						5
天草平家	3	5					8
醒睡笑	12	2					14
虎明本狂言	16			34	22		72
百夜小町						1	1
近松浄瑠璃	1			12	7		20
洒落本	3	1		4	1		9
五大力恋緘				2	2		4
浮世風呂	1				4	1	6

表2 中古・中世における〔見えなくなる消える〕の  
意義の作品別、用法別延べ用例数

	単純動詞	常 套 句	複合動詞	延べ用例数
竹 取 物 語	3	0	2	5
大 和 物 語	7	1	0	8
源 氏 物 語	19	1	1	21
今昔物語集	43	0	2	45
平 家 物 語	9	3	10	22
曾 我 物 語	6	1	1	8
御 伽 草 子	11	8	4	23
天正狂言本	2	2	1	5
天 草 平 家	2	0	1	3
醒 睡 笑	9	2	1	12
虎明本狂言本	6	8	2	16

- \* 常套句の用法は単純動詞用法に含まれるが、主体が限定される常套句表現と主体が様々な種類に分かれる単純動詞用法を区別する必要から項目を分けた。
- \* 『伊勢物語』はすべて〔死ぬ〕の用例であり、〔死ぬ〕の用例は単純動詞でしか使われないため表に入れなかった。「ウセタマフ」は単純動詞に数えた。
- \* 『今昔物語集』は山口仲美氏の論文「かきけつやうにうせぬ」の中の〈表2〉により、この表現の出ない巻二十二（本朝）から巻三十（本朝付雑事）まで巻二十七を除く八巻を対象としたものである。

注記

- (一) 天正六年(一五七八)七月吉日「正久」の奥書と署名を持つ。ただし、この本文と奥書の文字が違うこと、後世のテキストよりいぢじるしく一段化が進んでいることなどから、国語学的な価値に疑問が提示されている。峰谷清人『狂言台本の国語学的研究』(二〇九頁～二二頁)しかし又、『別記は後人のものかもしれぬが、内容は前述諸本(虎明・虎清・天理)の書写形態より一時代古い、全く筋書き風のものであるので、天正頃の狂言の姿を示すものとみることが出来る。』
- 『大系・狂言集』解説 二二頁 峰谷清人
- (二) 一例を示す。《はいましりとてかならずうせるとゆふいま一はとさいそくするそれかしほを見たゆふ……》(天正本・くりやき)
- (三) 《なんぞおのれめがいとまもこはいで、よそへうするのみならず、じせんせきのしうげんをうたふ事はくせごとにてある》(虎明・じせんせき) セリフで用いられている。
- (四) \*山口仲美「かきけつやうにうせぬ」(昭和四十七年三月『説話文学研究六』慶応義塾大学文学部説話文学研究会編) この中の〈表二〉で氏は『今昔物語集』のすべての巻の常套句表現の用例数を出しておられる。仏法、霊鬼物に多く、合計四十四例を数える。\*小久保崇明『大鏡の語法』昭和六十年明治書院 第四章 大鏡の語彙一四頁『大鏡』における「死ぬ」とその類義語 \*小久保崇明「御年六二にてうせさせおはします考」昭和五十三年『語文』日本大学国文学会
- (五) ①「居る」を卑しめて言う山梨、長野など。②「来る」を卑しめて言う、山梨、大阪、和歌山、徳島など。(『日国』

より)

- (六) 森田良行『動詞の意味論的文法研究』第四章 動詞の語彙結合 二七七頁
- (七) 転義のごく初期と思われる。《わとはのみそぬす人か、とくとくうせよと追ひ出す》(室町期物語・雀草子)
- (八) (注四)の「かきけつやうにうせぬ」(表二)を参考にした。
- (九) 慣用句の中にニ格が入り込んでいる事実は、それ以前にニ格に至る過程があるはずである。『今昔』の次の例はこの前段階として一過程を表すのではないか。「其ノ鷹亦鳥ヲ不取ズシテ飛テ雲ニ入テ失ニケリ」(巻二十九・第三十四)、「猿ハ木ニ傳ヒテ失ニケリ」(巻二十九・第三十五)。
- (一〇) 上接(失せ果つ、失せ行く、失せ終る 等) 下接(落ち失す、消え失す、飛び失す、逃げ失す 等多数ある。)
- (一一) 「あふるがらがさをとつてうせて……まんまとぬかれうせた……」(虎明本狂言・すゑひろがり)「このがたがた丸を忘れてうせた」(東海道四谷怪談)
- (一二) 「うせ行ぬ」(醒睡笑)、「うせあがらないか」(遊千方言)、「このたびぞ世は失せ終らうと申したれば……」(天草平家 卷四 第三)